


基本CG23枚
本編231枚

妻のエロアカウント





星空育代は黄瀬千春と昼食を共にしていた。
専業主婦の自分と違い、女手一つで娘を育てている千春は
エネルギーに満ちて輝かしく見える。
意図せず注目してしまうのはその美貌だ。
歳を取る毎に肌のツヤや張りの衰えが気になる育代は
千春の瑞々しい肌を羨ましく思った。

「どうしたの？ ジッと見たりして。何か付いてる？」

「う、うん。やっぱり仕事してた方が若いのかなーって…」

「フフフツ、化粧のせいじゃないの？？」

「育代さん、最低限のメイクしかしてないでしょ」

「まあ… でもそれだけじゃなくて… 上手く説明できないけど」

「そうねえ、男の人達に見られてるってのが効いてるのかもね」



主婦の育代にとって周囲の目とは

すなわち近所の主婦達の事を指す。

周りからどう見られるか、どう期待に沿えばいいか。

そう言う事を考えながら生活を送るのが常である。

主婦が相手の場合、波を立てない様に気を付けるのが大事になるが、

千春のように男性と仕事を共にする場合は勝手が違うだろう。

信用という面でも女性的魅力という面でも

自身を誇示しなければならぬ千春と

正反対の態度を臨まなければならぬ自分とでは大きく違う。

夫以外の男性の目を気にする必要がない育代にとって

領^{うなず}ける理由だった。



「そういう事気にしなくていいから
どんどん老けちゃうのかもね〜…」

「アハハッ、多分育代さんが考えてるのとちよつと違うかな。
もつと直接的な意味」

「え？」

「んふふー、どうしよつかなく… 育代さん知りたい？」

「うん、知りたい」

「んー、あー… やっぱやめようかなー…」

「えー、何よ、気になるじゃない」

「うん… 育代さんとはあんまり」

「下ネタ言い合う事なかったからやっぱり恥ずかしいかも…」

「下ネタ…？」

「うん… 軽蔑されちゃうかもしれない…」




そこまで言われてしまうと後に退くのも同義である。
気は進まないが興味があるフリをした。

「軽蔑なんかしないわよ。良かったら教えて？」

「そう……？ 実はね……こういう事やってるの」

そう言っって千春はスマホを操作して画面を育代に見せた。





スマホのディスプレイに映し出されたのは女性の裸だった。顔は映らないようにしているがさらけ出した乳房からは乳首がハッキリ映っており、下腹部も露わとなっている。ほぼ間違いなく、千春自身の体である。



「これって……!」

「そう、自撮りって奴。」

これをたまたまにSNSに投稿してるの」



「もちろん他の誰にも私だって分からないようにしてるわよ？
見てるのは顔も知らない男の人ばっか」


「こ、こんな事して… どうするの？」

「どうもしないわよ？ 見せてるだけ。

でもね、結構良いのよ〜！

見られてるだけでも興奮するって言うか…

女として気が引き締まる感じがする！」



アハハと笑う彼女を呆れ気味に育代は見た。
しかし夫のいない千春が
男性に裸身を晒した所で不貞を問うのは筋違いだ。
強いて言えば彼女の娘や他の親族がそれに当たるが
内緒でしているのであれば友人として殊更否定する事もない。



「育代さんもやってみたら？」

男の人に見られてるって意識すると結構変わるわよ」
夫のいる自分が他の男性に肌を晒すのは浮気に近い。

とても真似出来る事ではないが
愛想笑いをしている内に千春は

SNSで自撮りを投稿する手順をつらつらと説明し始めた。



「おやすみ」

「おやすみなさい」

夫の博司が寝室へと向かう。

娘のみゆきはもう自室で寝ているので
リビングに残っているのは育代ひとりだった。

判を押したように繰り返される日々の中。

セックスは習慣の内に入っていない。

最後に抱いてくれたのはいつだろうか…

夫は仕事で疲れているのだと分かってはいるが
セックスレスのまま歳を取るのは不安だった。

しわしわのお婆ちゃんになってからでは遅い。

まだ女の魅力がある今の内に性を謳歌おうかしたい――

そんな妄想が頭によぎった時、育代はハッとした。

(いけない。昼間の千春さんの話に感化されちゃってるなあ……
千春さんは夫がいないからいいの……
私には博司さんがいるんだから
体を他の男の人に見せるなんてダメ……)

頭では分かっているのだが考えれば考える程、
好奇心が首をもたげる。

自分が誰か分からないような写真なら
夫が傷付く事もないのではないか。

誰か分からない相手なら浮気にはならないのではないか。

誰か分からない写真を誰か分からない人が見た所で
何にもならないのではないか。

そんな事を考えながら入浴すべく風呂場へ向かう。





脱衣所で裸になり鏡を見つめる。

若い頃と比べると脂肪が付いたが

まだ女として魅力があると思えた。

昔は言い寄ってくる男たちに辟易へきえきとするだけで

嬉しいなんて感じた事はない。

だが結婚して歳を取り、

すっかり男から言い寄られる機会がなくなった自分は

どうだろうか。

以前は当たり前前にあった男を引き寄せる魅力が

今はもう失われているとしたら寂しいと思うかもしれない。

害はない。

危険もない。

だったら……

育代は高鳴る鼓動を感じながら

スマホの動画撮影アプリを起動した。



背後に特徴のある物が映らないように気を付けてカメラを構える。
顔は映らないようにするのが絶対だ。
乳房を捉え、性器が映らないギリギリまで下腹部を画面に収める。




（おっぱいに自信がある人は
おっぱいを映す事が多いって言うってたっけ…）



自分の胸は大きい方だ。

今までの育代の人生の中で胸の大きさを自慢する事は一度もなかったが、ここに来て何だか頼もしいような誇らしいような気分にした。

パシヤリ。



出来栄えを確認する。
陰毛まで映したのはやり過ぎだったかもしれない。
しかし乳房や腰回り、肌の状態、素人目ではあるが悪くない。
自分の体をアピールしつつ自分という個性を
排除している点も申し分ない。
これでは誰かなんて分からないだろう。

育代は満足した気持ちで風呂へ入った。

風呂から上がった育代はソファに座るとスマホを手にとった。
写真を撮るだけで満足するならそれで良かった。
しかし好奇心は未だにくすぶっているようだ。

博司が自分の携帯を手にとった事は
電話で交代を頼んだ時くらいで

自発的に内容をチェックする事がないのは
長い結婚生活で知っている。

あとは星空育代である痕跡をSNSで残さなければ安全のはずだ。





千春に教わった通りにSNSのアカウントを作る。
そして特に何の気負いもなく

先程脱衣所で撮影した画像を投稿した。

文章が全くないのは寂しいので一言添えてみる。

(なんとなく撮ってみました…と)

プロフィールも「一児の母です」という申し訳程度の一文である。

これ以上は書く気がしなかった。

何も変わりはない。

だが自撮りから投稿というひとつの工程を終えて
育代はすっかりした気分だった。

翌朝。

博司が出勤し、みゆきが登校し、一通りの掃除洗濯をして
ようやく育代は一息ついた。

コーヒーでも淹れようかと考えた所で
昨夜の自撮りの事を思い出した。

何となくSNSを開いてみる。

何があってもどうと言う事はない。

と、思っていたのだが…





0だったフォロワー数が53になっていた。

最低でも53人が自分の裸を見た事になる。

しかもフォローしたという事は好意的に見てくれたという事だ。

コメントにも返信があった。

「すごくエロいです。もっとみたいですよ」

こちらにも好意的なものだ。

もっと見たい——

その言葉は育代の胸を熱くさせた。

裸を見られる事がこんなに興奮させるなんて知らなかった。

長らく妻として母として、女から離れていた育代は

自分の体に興味を持ってくれる人がいる事に感動を覚えていた。

1週間後。

千春との食事を楽しみにしていた育代がいた。話したい内容はもちろん自撮りについてである。

あれから毎日胸の自撮りをしては投稿し、フォローが増えたりコメントを貰うのが楽しみになっていた。

「えっ!?! 育代さんも始めたんだ!」

「へー、教えてよ。私もフォローするから」
「う、うん。えーと……これなんだけど……」

今やすっかり慣れた手つきで育代は自分のSNS画面を開く。アカウントの紹介ついでに今まで撮った画像を千春に見せる。



「へ〜！ いいじゃない！ 博司さん知ってるの？」

「知ってる訳ないでしょ！ ……内緒にしてる」

「ま〜、そうだよ。確認しただけ」

「うん… やっぱり良くないかな…」

「いいんじゃない？ 浮気してる訳じゃないんだし。

会おうって言うてくる人いると思うけど

誰かと会ったりはしてないんでしょ？」

「しないしない！ 見せるだけ。」

会いたって言う人いたけど断ったわよ。無理！

「だよね〜。じゃ、いいでしょ。別に」


「そう… よね…」

「それより自撮りのコツ教えてあげよっか？」

「う、うん！ お願い」

元々今日の目当てはそれだった。

自責の念は影を潜めて好奇心が身を乗り出す。



手前側のカメラはインカメラと言って背面側のカメラ、アウトカメラより解像度が低く撮影はアウトカメラを使った方が良い事。なのでタイマーを使ってアウトカメラで撮影した方が良い画像になるといいう事。撮影した画像をアプリを使って加工する事。出来るだけ首から上を見せた方が閲覧者が喜ぶ事。画像だけではなく文章やタグで閲覧者を増やすコツなどを教わった。




「顔全部見せるのは無理だろうけど
〇元くらいなら平気だと思っわよ。
いつもとメイク変えればより安全」

「そうね…」

An anime-style illustration of a woman with short, vibrant purple hair and purple eyes. She is wearing a white, long-sleeved, form-fitting top with a subtle lace-like pattern at the neckline, and a dark blue skirt. She has a confident, slightly smiling expression. The background shows an outdoor cafe setting with wooden tables and chairs.


千春のフォロワー数は2万を超えていた。
育代のフォロワー数は3百を超えた程度なので
育代にとって大先輩だ。
学ぶ点も多い。

An anime-style illustration of a woman with long, straight brown hair and orange eyes. She is wearing a bright yellow, long-sleeved dress with a white collar and a white belt with a gold buckle. She has a gentle, smiling expression. The background is the same outdoor cafe setting as the other character.

足まで映したり色んなポーズを取っている画像を見て、
自分が初めて自撮りした時から
胸のアップばかり撮っていた事に気付く。
どれも似たようなものばかりだった気がする。
今のままではいけないと考えながら
千春の自撮りを眺めていると気になる画像があった。

それは千春が男性とセックスしている画像だった。
育代は思わず息を飲む。





「二、二、これ…!?」
「ああ、見ちゃった?
それはカレよ」
「あ… 彼氏？」
「そう」

千春は夫と
死に別れていると聞いている。
恋人がいても不思議ではない。



「こういう事も… 載せるんだ…」
「まー、

自撮りも彼氏も遊びだからね。こ
こういうのも延長線の内かな？」

「遊び…」

「やよいが成人するまで

再婚する気はないし

本気になるのも嫌だからね。

遊びって割り切ってるの」

「うん… そうよね。」

その方がいいかもね。

でもこういうのを載せるのは…」



「でしょ?」

「何なら彼氏貸してあげよっか?」

「えっ? えええ!?!」

「アハハ、やーね。」

「変な意味じゃないわよ。」


「自分で撮るのって限界あるでしょ?」

「カメラマンがいると便利よ」

「カメラマン!」

「そう。紹介したげよっか?」

「飲み屋で知り合った子なんだけどー」



彼氏との馴れ初めを聞いていたら
いつの間にか会う手筈になっていた。
写真を撮る技術も
加工する技術も全く知らない
育代にとって渡りに船ではあるが
急な話で心の整理が付かないでいた。
自撮りの後輩である育代の
世話を焼きたいのかもしれないが
感謝より戸惑いの方が大きい。

断るつもりがあったのかなかったのか。

数日の猶予があったにも関わらず、

育代は千春の彼氏と出会いを果たしてしまった。

フリーターという彼は一回り年下で年齢よりも若く見えた。

「どもっス」

「こんにちわ…」

「私は仕事だからもう戻るけど育代さんに変な事しないでよね！」

「分かってるって。カメラマンでしょ？」

「そー！ 育代さん、こいつが変な事しようとしてきたら

遠慮なく殴っていいからね。

会社近いから電話くれたらすぐ駆け付けるし安心して！」

「あはははは…」

「しないっての。無理矢理やる趣味はないから安心して育代さん」

「は、はあ…」

「それじゃ、また後でね」

「うん、ありがとう…」



「それじゃ行きますか」

「え、ええ……」

行き先はラブホテルだ。

この男とセックスをするつもりはないが

夫以外の男性とこういう施設を利用するのは不貞行為に違いない。

やはり止めた方がいいのではないか。

そう逡巡している間に育代は手を引かれて

ホテルへと連れ込まれてしまった。



「最初千春にカメラマンやれって言われた時は面倒くせーなーって思ってたけど

育代さんのレベル高くてテンション上がったわ。何かから撮る？」

「え、ええ…と…」

千春の彼はデジカメを手にして

少年のようなキラキラした瞳で育代に尋ねる。

いつも自分が撮ってるのは乳首を出したバストアップだ。

初対面の男の前でさらけ出せる姿ではない。

焦るあまりに

部屋から抜け出すという選択が頭から抜け落ちていた。



「こういう時はカメラマンがリードすんだよな！」

「っべー、プロみてえ！ 育代ちゃん、シャツ脱いでみよっか！」
年下の男にちゃん付けで呼ばれるのは不快だったが
抗議する余裕はない。

シャツを脱げと言われて脱ぐのはやはりマズい。

今までの自撮りは自分と不特定多数の第三者のみで完結された
一方的な発信だった。

自分と誰かとの直接的なコミュニケーションによって
性的な画像を提供するのは
セックスに準ずるものがあるように思えた。



「いーよ、いーよー!」

色っぽくというのがよく分からなかったが
育代はゆっくりシャツを脱いで見せた。

パシヤリパシヤリパシヤリ。

シャツター音が鳴るたびに胸が熱く高まっていく。

「次は下脱いでみよーか!」

「うん…」

「いーよ、いーよー!」

パンツが落ちて身軽な恰好になった育代は脚が震えた。

乳首までネットに晒した育代だったが

下着姿で夫以外の前に立った記憶はない。

背徳感と高揚で気がおかしくなりそうだった。



「いーよ！ 育代ちゃん最高だよ！
めっちゃ勃ってきたわー！ 次、ブラ行こっか！」

勃つと聞いて思わず育代は男の下腹部に注意を注ぐ。
ズボン越しにも隆起しているのが分かる。

ああ、彼はネットで自分の裸身を楽しんでいる人達と
同じなのだなと確信した。

数字と文章でしか認識できなかつた
フォロワーの姿が今、目の前にある。

気が付けば呼吸が乱したままショーツを降ろしていた。
彼の呼吸も乱れており、
ふたりの荒い息遣いとシャッター音だけが部屋を支配している。
自身の濡れた下腹部に一瞬気を取られたが
育代は背筋を伸ばして彼と彼の構えるカメラを見据える。





しばらく無言で育代のヌードを撮っていた彼だったが
ハツとしたようにカメラを降ろす。

「ど、どうすっか… とりあえず脱いでいい？」

熱くなってきたわ…！」

「うん、どうぞ…」

不思議とよこしまな感じはしなかった。

むしろフォロワー達の姿として

今まで着ていた彼の衣服は邪魔だった。

いそいそと彼は慌ただしく服を脱ぐ。

育代と彼氏は産まれたままの姿で向かい合った。

やはりペニスを勃起させた裸の姿の方が

フォロワーの姿として正しい気さえした。

自分が女として精一杯アピールしているのだから

男は勃起して答えるのが順当と言える。



「はあはあはあ……どうしたらいい？」

「はあはあ……ど、ど、どうすっか……！」

「っべー……頭の中まっ白だわ……」

「私に何をして欲しい？」

「えー……チンコしゃぶって欲しい！……てのはアリ？」

「ちゃんと撮ってね」

「ういすー！」

今の彼はフォロワー達の姿なのだ。

フォロワー達は育代がペニスを啜える画像を見たいと思っている。そう考えたら他の事が頭から滑り落ちて

フェラチオする事しか考えられなくなっていた。

むせ返るような雄の匂いの中、
育代は空想と現実が曖昧になっていた。



ニギ
ニギ
ニギ
ニギ



フォローのひとりに自身のペニス画像を送って来る男がいたが、それを見た時は嫌悪するだけだった。

だが今は違う。

自分の体で興奮した男のペニスを

直に舐められる事に喜びを感じていた。

家で自撮りをして興奮していた時に

画像を送ってきた男がすぐそばでペニスを勃起させていたら

喜んで舐めていたかもしれない。

夫のペニスをフェラチオした経験があまりない育代だったが
高まった欲情が経験をカバーする。
一心不乱に舌を這わせては吸い付いた。



千春の彼氏はあえぎながらもシャッターを連打する指を緩めない。
不慣れなフェラチオで疲労していく育代だったが
シャッターを切る音が鳴るたびに奮い立った。
一枚一枚に映るペニスはそれぞれが
フォロワー達のペニスなのだと思うと手が抜け
ない。
ひとりひとりのペニスをフェラチオするつもりで
育代は丁寧に、貪欲に、むしゃぶりついた。



「うっっ！ うっっ！」
いきなりの射精に育代は驚いたが
射精の快感に負けずシャッターを切る彼氏に安心した。
全部記録してもらわないと困る。
これはフォロワー達へのフェラチオなのだから。

ブルブル



青臭いザーメンは普段なら口には出来る代物ではない。
しかし今の育代にとって
他の何物にも代えがたい美味な物に思えた。
ペニスを中心に付着したザーメンを
ゆっくりと口の中で味わって飲んでいく。





「はあはあ… マジやべーわ…」

人妻がエロいってのはこーゆー事かー… いや、マジっべーわ…」
どう答えていいか分からないので

育代はひたすら彼氏のペニスを舐め続けた。

すると次第にペニスは硬度を取り戻していった。

「しゃぶんのはもういいからさ…
やらせてくくんない？ セックス」
禁忌の言葉に育代は我に返った。
セックスまでしたら完全に浮気だ。
フェラチオも浮気の範疇に入るだろうがまだ引き返せる。



「それはダメ… 千春にも悪いし…」

「そっかー。 育代ちゃんもその気かと思ったんだけどなー。
それ、汗じゃないっしょ?」

彼氏の指差した育代の下腹部は

小便でも漏らしたかのようにビショビショに濡れていた。

冷静さを取り戻した育代にとってただただ恥ずかしい。

返答に詰まったので誤魔化すべくペニスをチュウっと吸った。





「一回抜いてもらってなきや無理矢理やってるとこだったわく。
マジ育代ちゃんエロかったもん」

「やんのがなしっつーとこのまましゃぶってもらおうかな。
色んなポーズ撮りたいんだよね？ すっかり忘れてたけど」

「んじゃ、しゃぶりながらオナニーしてみよっか！
めっちゃエロい写真撮れると思うよ」

最初に彼のペニスを咥え込んだ時の気が触れそうな情欲は育代の中から消え去っていたが、フェラチオし続けていた慣れが抵抗を和らげていた。彼のペニスを舐め続ける事も彼の前でオナニーを見せる事も嫌とは思わなかった。





「いーよー、
育代ちゃんエロいねー！」
フェラチオしながらのオナニーは
時間の経過と共に
育代の熱を取り戻していった。
1度射精した千春の彼は
育代とは逆に冷静になったようだ。
彼の欲情に引っ張られて
育代が発情する事はなくなったが
カメラマンとして
信頼できる状態になったと言える。



安心してペニスをしゃぶり、
リラックスしながら
オナニーを楽しめた。
夫の博司には見せられない姿だが
「そういうもの」として
お互いに認識している
育代と彼の間だから
見せられるのかもしれない。



「チンコしゃぶんのは
適当でいいからさ、
もっとエロい感じで
あえいでみてよ。
めっっちゃ可愛くなると思う」
「はぁはぁはぁ……！」
言われたままにあえいでみる。
エロい感じというのが
やはり分からないが
クリトリスを撫でた時に
起こる快感の波を
そのまま声に出す。




聞いた事のない
自分の声に驚いた。
しかしここはホテルだから
家と違って
周囲に気遣う必要はないのだ。
この男も自分が
どういう人間なのか知らない。
誰にも遠慮などいらぬ。



「お〜…！ マジエロいわ！
ヤっっちゃうのなし？
めっっちゃ育代ちゃんに
挿入したいんだけど？」
「はぁはぁ！ ダーメ…
おチンチン
舐めてあげてるでしょお…？」
育代は笑って彼氏の亀頭を
ぺろりと舐め上げた。
そのまま亀頭を咥えつつ
クリトリスをいじり
嬌声をくぐらせる。



「い〜ね〜！
今の顔めっちゃエロいよ！
…俺も超カメラマンっぽくね？」
男が笑うと育代もつられて笑った。
こんなにエクスタシーを感じながら
リラックスしているのは初めてだ。



だからクリトリスを
中心に響いていた
快感の波がハンマーで
叩きつけられているかのように
激しくなっていたのに
気付くのが遅れた。
クリトリスから指を離しても
快感の波は残響となって止まらない。
ひと擦りすればより快感が
大きく激しくなって下腹部を襲った。
快感の波は次第に小刻みに早くなり、
そして大きな衝撃を予感させた。



「イツちやう… かもしんない…！」
「マジ!? シャッターチャンスじゃん！
いよいよ、いつでもイキなく」



これから起きるのであろう
未知の体験に
出産した時を思い出させた。
あの時と比べて
責任もなければ不安もない。
訪れるのは純粹な快樂。
育代は人生初めてのの
オーガズムを期待した。



「……………」
電気が走る。

クリトリスから膣を伝って
子宮を揺さぶり脳まで駆け上った。
一度ではなく数回。

数えてなどはいられない。

シャッター音をかき消すように

叫び声を上げた気がする。


自分の意志とは無関係に

痙攣していた腰が大人しくなって

ようやく息を整える余裕が出来た。



知識としてオーガズムは知っていたが
実際に体験するのとはしないのでは
雲泥の差だ。
育代は感動を胸に、
快感の余韻を下腹部に、
それぞれ刻みながらペニスを頬張った。



「育代ちゃんやらせてくんない？」

「…ダメ」

仮にこの男が無理矢理

セックスしようとした場合、

拒絶する事は出来ないだろうなと

育代は思った。

体ではなく、心がである。

ギリギリ…

本当にギリギリの所で浮気にならずに
済んでいるのは相手がこの男だからだ。
感謝を舌に込めてフェラチオに精を出す。



その後、フェラチオ画像を投稿して
彼氏にフェラした事が発覚し、
千春に大目玉を食らう育代だった。



数日後。

育代のフォロワー数は1万を超えていた。

今なお画面を更新する毎にフォロワー数は増えていく。

これも千春の彼氏のお蔭だ。

彼氏が撮ってくれた写真はもちろん気に入っているが、最も育代の心をくすぐったのは自分の書いたコメントである。

「フォロワーさん達のおチンチンを想像しながらペロペロしました」

というコメントに対して80件以上もの返信があったのだ。

自分も舐めて欲しいというものから

会いたいというものまでどれも似通ったものだったが

ひとつひとつの返信が嬉しい。



撮影した日の夜は夫への罪悪感で鬱に近い状態だったが今は当時の事を思い出しながら

コメントの返信を見てオナニーするほどである。セルフタイマーを使ってオナニー姿を撮って投稿しようとも考えたが

千春の彼が撮ってくれたオナニー画像と比べてみすばらしい出来栄えだったので投稿は諦めた。

自分にこれだけのファンが付いてくれたのにガッカリさせるような事をしてはいけない。

下手な画像を投稿してフォロワー数が減るような事があれば悶絶してしまう。

同じ理由で日課になっていた胸アップ自撮りも控えている。



問題は今後の事だ。

オナニーは千春の彼氏の前でした時ほどの快感を得られない。
自撮りする意欲はあるものの

自分の知識不足、技術不足のせいで次の画像を撮影できない
この二点。

今まで自撮りしていたのはハッキリ言ってオナニーだ。

そう自覚したのは彼との一件の後だが
誤魔化すのを止めた良い傾向である。

自撮りを始めた頃は何となく胸ばかり撮っていたが、
今は見ている人をオナニーさせる

エッチな画像を撮りたいという目的が出来た。
以前よりも良い画像が撮れるだろう。

多くの男性にオナニーさせる事が
自分のオナニーの快感を高めると確信していた。



そのためには撮影が必要なのだが育代は自撮りを諦めていた。
自分では上手く撮れない。
では誰に撮ってもらおう？

真っ先に思い浮かぶのは千春の彼氏だが
千春に念を押されたからとてもじゃないが頼めない。

では夫の博司か。

それはあり得ない。

そもそも夫の前で痴態を晒せるのなら
わざわざネットで裸を晒す必要もなかったように思える。

知人男性から探すのは論外だ。
リスクが大きすぎる。

今の生活を壊すつもりは一切ないし、
夫への愛情も決して揺らいでない。
ただ性生活が合わないだけなのだ。



「ミュキさん… ですよね」

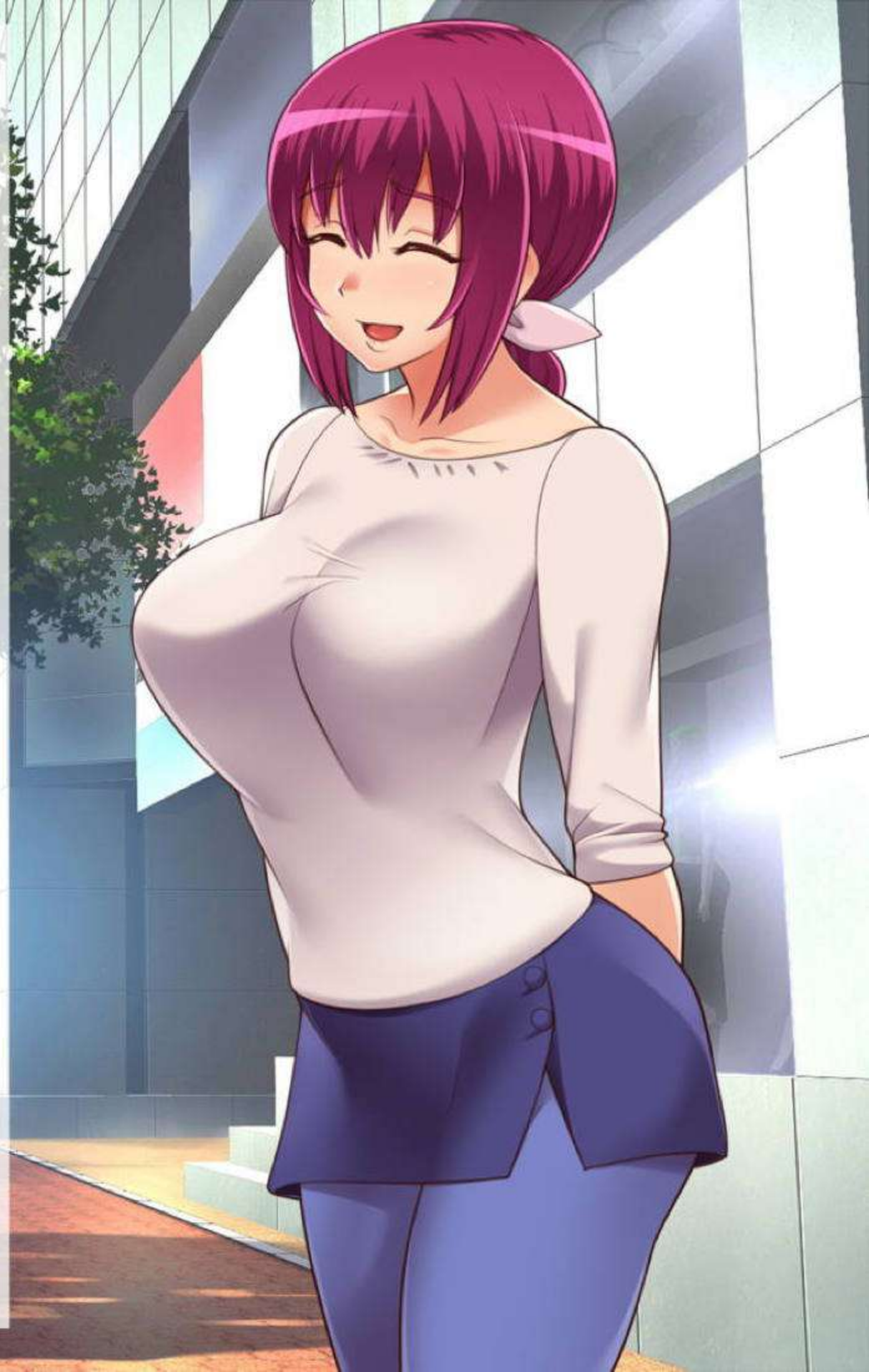
「は、はい… ギリーさんですか？」

「はい、そうです」

「あ、今日はわざわざお越しくださってありがとうございますございませ…」
「いえいえこちらこそお誘い頂きありがとうございますございませ」

ネットでカメラマンになってくれる人を探したが、
どこを探しても目に付く全ての人々が空虚にしか見えなかった。
テキストを剥がした先に居る人が
どんな人なのか分からないのは不安でしかない。

お金を払って技術のある人を雇う気にはならなかった。
金銭的にも技術的にもそこまでする価値は
自分にはないと思っていたし、
最低限指示通りに撮ってくれれば問題ない。



では誰を選ぶか、という問いに育代は自分の一番のファンを選んだ。初めて自撮りをした時に一番最初にコメントを残してくれた、それ以降も毎回欠かさずコメントを残してくれる熱心なファン。数回やり取りを繰り返して

コミュニケーションに問題がなさそうだと分かるとすぐにカメラマンをやってくれないかと打診した。

住居がそう遠くないらしい事も幸いして彼、ギリィさんは快く快諾してくれた。

「それじゃどちらで撮影しましょうか」

「あ、はい…案内します」

年齢は育代よりも少し上だろうか。

中肉中背でこれと言った特徴はない。

ポロシャツにスラックスという服装も普通だ。

態度も穏やかだったので育代はひと安心した。



ラブホテルなど利用した事は生涯で一度しかない育代である。
自然と千春の彼と入ったホテルへ向かった。

ふたりっきりの空間。

すでに異質な雰囲気部屋中に広がっている。

育代は緊張しきっていた。

ギリギリが急に抱き付いてこようものなら

悲鳴を上げて部屋から逃げる心構えをしている。
しかし彼の態度は密室の中でも変わらなかった。

「それではコレ、付けますね」

「はい……」



そう言うとギリィは荷物の中から手錠と足錠を取り出し自身の四肢に戒めを掛ける。

これはカメラマンを引き受ける際に彼が出した提案だった。少しでも育代を安心させようという気遣いが嬉しい。

「では鍵を預かってください。

こんなのでも撮影に支障はありませんからご安心を」

「ありがとうございます……」

ジャラリと両腕を上げて手錠を見せてくれたギリィに礼をして育代は彼の位置と反対にある棚にそれぞれの錠の鍵を置いた。ここままでしてくれるなら十分信頼に値する。

彼自身が鍵を持っていたとしても心配はなさそうだった。

「いつでも撮れますよ」
デジタル一眼レフカメラをギリギリは頼もし気に構えた。
育代は深呼吸した。
想像していた撮影状況通りだ。
いや、適度な緊張と興奮はイメージ以上である。
意を決してストリップを始めた。





ゆっくりと、出来るだけ色っぽく、
格好良く見えるように脱いでいく。
早くも全身に熱が回ってきた。

千春の彼氏の前で脱いだ時は彼の中に
フォロワーの姿を感じ取った。
彼は元々自分のファンではなかったし、
当時のフォロワー数は3百程度だった。

しかし今育代の目の前にいる男は
SNSをやり始めた当初から交流してきてくれた
一番のファンである。

今や1万3千となったフォロワーの化身とも言える存在だ。

男の前で肌を全て晒け出した育代が
確認したい事はただひとつだけだった。
迷いはなかった。

一瞬前まで取り繕っていた上辺の良さを放り出して
育代はズカズカとギリりの前まで進むと…





彼のパンツをスラックスごと強引に引き下げた。

「あっ……！」

遅しいペニスが上を向いて敬礼してた。

むわっと立ち上った臭気が鼻をくすぐり下腹部を火照らせた。

こうでなくてはいけない。

自分の一番のファンであるならば。

フォロワーの化身であるならば。

しかし似つかわしくない物が目障りだった。




「ギリリーさん。私の言う事が聞けますか？」

「は、はい」

亀頭をペロペロ舐めながら育代は問う。

育代の変貌にギリリーは初めて戸惑いを見せた。

自身のペニスをフェラチオする育代をファインダー越しに見つめ、言葉を待ち、シャッターを切る。



「今から手錠を外します。我慢して撮影する事は出来ますか？」
「もちろんです！」
私はミュキさんの一番のファンであり理解者であるつもりです！
ミュキさんの作品作りをお手伝いする事が一番の望みです！」
言って欲しい言葉を全て聞いて育代は軽く絶頂しそうになった。
すぐにでもクリトリスをこねくり回したい指を
意志で抑え付けて立ち上がった。



「はぁはぁはぁ……！」

ガチャガチャガチャと錠の鍵穴と鍵が擦れ合う。
指が震えて上手く鍵を開けられない。

しばしの間を置いて手足の拘束が解かれたギリギリに
張り付いている衣服を乱暴にはぎ取る。

そこには全裸で勃起させながら
カメラを構えている男の姿があった。

これで完成だ。

自分のフォロワーの化身、そのあるべき姿。



「はあはあ……！ 何を！ 何を撮りますか!?!
何でも言ってく下さい！」

「はあはあはあ……！ えっ……と……！」

ここまで来て何を撮るかまでは育代は考えていなかった。
ギリりと会うまでは

自分の裸身を撮ってもらう事を想定していたが
ペニスにキスした瞬間から「彼と」何かを撮る事は確定した。
しかしその先までは考えが至らない。
考えあぐねた育代にギリりは助言した。



「ではこういうのはどうでしょう？」

SNSでこれから何を撮るべきか

リアルタイムでフォロワー達に聞くんですよ！」


「それじゃエッチな事しか言ってこないと思うけど……」

「ミユキさんはエッチな事を撮りたいんでしょう？」

「そう……！ でした……！」

「まずは我々の自撮りを！」

「はい！ お願いします！」



三脚にデジカメをセットしたギリリーは撮影体勢に入った。育代の肩を手引き寄せせる。普段であればにべもなく手を振り払っていたはずだがSNSとの一体感を感じている今の育代にとってフォロワーの化身である彼と身を寄せ合うのは自然に感じた。

「3, 2, 1!」
フラッシュと共にシャッター音が鳴る。
ギリリーは手早くノートパソコンを操作して画像を育代に見せた。

「モザイクとかこれで大丈夫ですか!？」

「あ、はい! 大丈夫です!」

「写真だけじゃもったいないなあ!」

「動画撮りましようミュキさん!」

「動画ってよく分からないんですけど…」

「全部私がやりますよ!」


「良かったらライブ配信先のリンク貼ります! いいですか?」

「は、はい!」

テキパキとギリギリはキーボードを叩いて作業を進める。
ネットやパソコンに疎い育代は羨望の眼差しで彼の作業を眺めた。

「それじゃミュキさんお願いします! 文面考えてください!」

「はい!」



考える時間を置いて今の熱が覚めるのが怖かった。
育代はSNSにログインすると思っっている事を
そのままキーボードに叩き込んだ。

『今ギリリーさんとオフ会開いています。
これからふたりで何を撮るかアンケートを取りたいと思います。
撮って欲しい事を書いてくださいね。5分くらい待ちます』

「時間が掛かりますから決まるまで触りっこしまししょうか」
「はい♡」

ギリリーが育代の乳房を愛撫すると
冷めかかった愛液が再び熱を持ち始めた。
育代もギリリーの陰茎がカチカチになるまで手でシゴく。
ふと見たパソコンのモニターには
自分たちが互いの体をまさぐり合う姿が映し出されていた。
入場者は増え続けている様子だった。






「こ、これって今も放送されてるんですか？」
「そうですね！」
モザイクの位置は固定なんであんまり動かない方がいいですよ！」
「は、はい！」

顔の一部はモザイクで隠されているが声は加工されていなかった。
あまり喋り過ぎると知人にバレてしまうかもしれない。
声を出さないようにすると返ってあえぎ声は大きくなった。
おかしくなってしまうのではないかと
不安がよぎった時に指示待ち時間が経過していた事に気付いた。

『セックス』『セックス』『SEX』
『メンヘラっぽい』
『人妻なんだろ？ 夫が可哀想』
『俺もオナシヤス』

流れてくるコメントはほとんどが好意的な物だったが
一部に辛辣な物もあった。
胸にチクリと刺さったが浮気まではしないつもりだ。
自分がやるのはオナニーであり、オナニーの手伝いなのだ。
浮気ではない。





「これはアンケートに絞るまでもなく決まりですね！」
「セックス… しかないような…」
「セックスに決まりましたー！」
ギリリーの高らかな叫びで動画のコメントも沸き立った。
しかしセックスだけは困るのだ。

「あの… セックス以外でお願い出来ませんか？」
今度は動画のコメントが非難の色に染まる。
胸がザワついた。

「駄目ですよミユキさん… 皆で決めた事なんだから。嘘ついたら信用なくしちゃいますよ?」

「嘘なんて言ってるな… あ!」

自分のコメントを確認しようとして

SNS画面を更新したらフォロワーが3人減っていた。


「わっ、私、嘘なんかついてないです!」

「じゃあセックスしましょう。」

早くしないとどんどんフォロワーが減ってっちゃいますよ?」

「えっ!? え!?!」





「ミュキさんは人妻だから浮気しないようにしてたんですよね？」
「そっ、そ、そうです！」

「でも他の男のチンポ舐めたりしてましたよね？」

「えっ… は、はい…」

「でも浮気じゃないですよね？」

「は、はい！ 浮気じゃないです！」

「じゃあセックスしたって浮気にはなりませんよ」

「えっ!? で、でも…」

「ミュキさんとしてチンポ舐めたりセックスするのは
浮気にはなりません。」

リアルの方で知り合いのチンポ舐めたりしないでしょう？」

「し、しないです…」

「そうでしょう？ リアルの方とミュキさんは違うんですから」

「えっ？ いえ…！」

「全然違うでしょ？ ミユキさんとリアルで」

「は…はい…」

「だから良いんですよ。」

「ミユキさんとしてセックスする分には浮気になりません！」

「皆もそう思っていますよー！」

「え…」

「セックスしてください(俺と)」

「ミユキ頑張れー！ー！ー！」



「あ……」
「やる前にアンケート取りますー！
生でやるか？ ゴムでやるか？ どっちがいいでしょう〜!?」
「え……」

「すぐに勝負が付きましたねー！ 生で中出し決定でーすー！」
「あの……」
ギリギリは育代の耳元でささやいた。
「大丈夫。今ならまだフォロワー減りませんよー！」
「あ…… はい……」





あ
あ
あ

あ
あ

「あうっ！ あうっ！
あうっ！ あうっ！」
「ヤッバ……」
「ミュキさんの生マン」
「気持ち良すぎ……」
「出そ……！」



「あうん！」
「はあはあ！」
これはすごい名器ですよ！
一児の母とは思えない
締めまり具合ですよ！
ミュキさん、今まで
このおマンコを使った
人数を教えてください
もらえませんか？」



あーっ
あーっ
あーっ

あーっ
あーっ

「はあはあ… 夫と…
ギリリーさんだけです…」
「お〜〜！
セカンドバージン
もらっっちゃいました〜！
ありがとう〜！」
「はあん！」
「ああ…！ 駄目だわ…
も、もう出る…！」



あーあーあー

あーあ

おっぱい

おっぱい



「いやー、すっごーいー！
おまんこも気持ち良いけどね、
おっぱいもいいわー。
肉布団！
まるで母親のような…
あ、お子さんいたんだっけ！」



「ミュキさんも気持ち良いでしょ？
スッゲー腰振っちゃって〜」

「は、はひっ……！！
気持ち良いですっ……！！」

「エロい写真SNSで見てもろうのと
どっちが気持ち良い？」

「はっは……っ！！ セックス……！！
セックスです……！！」

「生セックスライブ配信だもんね〜、
そりゃ気持ち良いよ。」

「中出しされる所まで
皆に見て貰っちゃってさ〜」



「はっはっはい！ すっごく……
気持ち良いです……！」

「旦那さんも見てたりして」

「え……」

「冗談冗談！」

「何百万何千万とアカウントあんのに
偶然見つけられないって！」

「は、はい……」



「でも一応言っとこうか！
あなたも、ごめんなさいって」
「…あなた、ごめんなさい」
「ダメダメ！ もう一回！
あ、出るよ！」
「はい！」
「中出しされてごめんなさい、
ごごめんなさい……」
あなた……！ んんんくっ……！！」





はは
はは
...

は
...

腔の奥で射精された快感を最後に
育代の意識は飛んだ。



「はあく……」

今日何度目か分からないため息をつく。

昨日はあれから気を失ってしまい、

気付いたら土下座をしているギリリーの姿があった。

彼の言い訳によると全ての行いはミュキのためらしい。

突発的な行動もあったがミュキのファンを楽しませる事が一番の理由だそうだ。

そんな理由のために

セックスを強要されてはたまったものではない。

一線を越えてしまった。

これはもう夫に対しての明らかな不貞行為だ。



「はあ〜……」

中出しされてしまったから病院に行かなければいけない。
内科か婦人科か……
性交後にも効く避妊薬があったはずだ。
性病の検査もした方が良さだろう。

「はあ〜……」

またため息をついてしまう。
自分の愚かさを悔いるばかりだ。
もうSNSは止めよう。

日課だったSNSのチェックも怖くてしていない。
このまま全て忘れよう。


自撮りをしていた事もギリギリという男とセックスした事も。
こちらから接触しようとしなければあの男とも会う事はない。
せめてもの罪滅ぼしに

今日は凝った手料理でもしようと考えた矢先に電話が鳴った。
着信相手の名前にはギリと表示されていた。

「なっ、何で……！」

彼とはSNS内のダイレクトメールでしかやり取りしていない。
他に連絡先なんか交換していなかったはずだ。
無視する方が怖かったので
育代は震える手で通話ボタンを押した。





『返信がなかったたのでこちらの方にご連絡させて頂きました。今お時間よろしいですか?』

「…**何でこの番号を知ってるんですか?**」

『昨日ミュキさんが寝ている間に。』

『私の番号もその時登録させて頂きました』

「**勝手に…!**」

『怖がらないでください。』

ミュキさんに危害を加えるつもりはありません。

よろしかったら今後の方針についてお話ししたいと思ってご連絡させて頂いた次第です』

「**今後の方針…?**」

『ミュキさんの活動についてですよ』

「**もっ、もうやりません! 私の事は放っておいてください!**」

慌ててギリギリとの通話を切る。

悲鳴混じりに大声を出したせいで息が乱れる。

手足が震えていた。



何が今後の方針だ。

またセックスしようとしても言うのか。

警察に連絡した方がいいのかもしれない。

でも、何て言う???

自分から呼び出して自分からホテルに誘ってレイプされたと?

馬鹿げている。

自分が馬鹿だったのだ。

千春の彼氏との経験が自分にとって都合の良い物だったから

他の男でも同じようにしてくれる事を期待した。

セックスした事はもういい。

許すから放っておいて欲しい。

ネットとは無縁だった今までの生活を送ればそれで良い。



「……ッ！」

ビクッと肩が震える。

意識を失っている時に見られたのは携帯の番号だけだろうか？
財布の中まで見られていたとしたら？

本名も住所も載っている保険証を財布に入れてあった。
最悪の場合、あの男が家に来るかもしれない。

不安が的中しないよう祈りながら

リダイレクトしてギリリーの番号へ発信する。
すぐに彼と繋がった。

「あ、あの……！ 財布の中まで見てませんよね？」

「申し訳ありません。」

失礼かと思いましたが調べさせてもらいました。
星空育代さんとお呼びした方がよろしいですか？
育代は急速に血の気が引いて倒れそうになった。

「お待ちしておりました」
「……」
「どうぞ、お掛けになってください」
「……はい」

ギリーは昨日のホテルから近い喫茶店を指定した。
警察には説明しようがない。
喫茶店なら人目もあるから変な事は出来ないだろうと
育代は歯を食いしばる思いでギリーと会う事を決心した。
家族のためにも家に踏み込まれる事態だけは
絶対に防がなくてはならない。





「何を注文しますか。ここは私が払いますよ」

「いえ、結構です！」

飲み物が届く時間も飲む時間も惜しい。

用件を済ませて早く帰りたかった。

ギリギリはアイスコーヒーを店員に注文すると

自分のアイスコーヒーを一口飲み、

リュックからタブレットを取り出した。

タブレットを操作しつつ口を開く。

「あれからSNSは見ましたか？」

「…見てません」

「すごい事になってますよ。ほら…」

タブレットの画面が育代に向けられる。

自分のSNSのページだ。

フォロワー数が3万を超えていた。

目標としていた千春のフォロワー数を軽く超えている。

それにも驚いたがページの変わりぶりに呆気に取られた。



「初期設定ではもったいないと思い、
勝手ながらプロフィールやヘッダー画像を変えさせてもらいました」

「これって他の人は変えられないんじゃない?」

「昨日ミュキさんが私のパソコンでログインしたじゃないですか」
「あっ……!」

「ミュキさんはあまりパソコンやネットに詳しくないみたいですね。
よろしければ今後も私がサポートしたいと思っていますんですが
いかがでしょうか?」

「…サポートって?」

「サイトの運営や撮影、その他もろもろ。」

「ミュキさんの活動のサポートです」

「私… もうやりません……!」

「本当にそれでよろしいのですか?」


「私は星空さんの意見ではなく、ミュキさんの意見を聞きたいです」

「ミュキ… の…?」

「はい。昨日の件にしたって私の独断ではありませんが
ミュキさんのファン、そして何より

ミュキさん自身が望んでいた事をしたつもりです」

「…ッ!」

A woman with short, vibrant purple hair and purple eyes is the central figure. She is wearing a white, long-sleeved, form-fitting top and a dark blue skirt. She stands in a cafe or restaurant with red booth seating and wooden tables. In the background, there is a framed picture of a burger and a lit candle on a table. The floor has a checkered pattern.

店員が来たのでギリリーはタブレットをリュックに戻す。
店員はアイスコーヒーを育代の前に差し出すと一礼して
持ち場へ帰って行った。

育代の頭は整理が付かないでいた。
考えれば考えるほど恥ずかしい。

この男を呼び出してホテルに連れ込み
服を脱がしてフェラチオして肌を寄せ合っただのは自分だ。
これでレイプされたと憤るのは身勝手過ぎる。



「す、すいませんでした…
私が悪いのにギリィさんを悪者みたいにしてしま…
自分が恥ずかしいです…」

「謝る事も恥じる事ありませんよ。」

「ミュキさんがやりたい事してファンが喜ぶなら私も本望です」

「いえ…でも本当に…夫に悪いのもうやりません…
SNSももう止めます」

「それが星空さんの意見ですね？」

「ミュキさんとしてはどう思ってるんでしょうか？」

「ど、どっちも私です！」

「本当にそう言い切れますか？」

「ミュキさんとしてはまだ続けたいと思ってるんじゃないやありませんか？」
「ミュキキとして…」

「今までの自分は全てにおいて家族を優先していた。」

「時には自分の気持ちを捨てて理想の妻や母を演じる事もあった。」

「しかしミュキキとしてSNSをやるようになってからは
女の欲望や快楽に忠実だった。」

「昨日のセックスを思い出そうとすればするほど下腹部に熱が増す。」



「でもダメですよ… 本当に… 夫に悪いですから…」

「ミユキさんとしてはまだ続けたいんですね？」

「……」

違うとは言い切れなかった。

嫌悪感というフィルターが取り除かれた状態で回想する
昨日の出来事はどれも官能的だった。

だが夫のためにもこれ以上続ける訳にはいかない。

「でしたらこうしましょう。」

私の言う事を聞かなければ

星空さんの家族に昨日のセックス動画を見せます」

「え……？ 何を言ってるんですか……？」

「脅迫ですよ」



腰に手を回したギリリーが
育代をラブホテルの一室にエスコートする。
はたから見れば普通の恋人同士に見えるかもしれない。

「綺麗ですよ、ミュキさん」

「…ありがとうございます」

プロの手によるヘアメイクとメイクアップという
フルメイクは結婚式以来だった。

身に着けている服も靴もアクセサリーも下着でさえ
ギリリーが選んだ物である。

爪先から頭の先まで全身が彼の色で染まっていた。



「これだけ見た目を換えれば顔隠さなくてバレませんよ」
「そうでしょうか…」

確かに大分変わったと思いますが
夫に見られたら私だって気付くんじゃ…」

「分からないと思いますよ。」

ミュキさんは夫の前でもこんな風に乱れるんですか？」

そう言うとギリリーはタブレットを取り出して

昨日ライブ配信した育代のセックス動画を再生する。

獣のような女のあえぎ声が部屋の中に響く。

画面に映る女の表情は快楽に溺れて知性が抜け落ちている。


これが自分の姿だと思おうと

下腹部が熱くなり新品の下着を濡らした。

「夫は… こんな私を知りません…」

「だったらなおさら気付きませんよ。 安心してください」

「はい…」



ギリリーは様々な角度から育代を撮り始めた。
写真を撮りつつ育代の周囲をグルグル回りブツブツ呟いている。
「うーん… 自然な姿が一番なんだけどポーズ取ったりするか？
でもわざわざとらしいのは嫌だな…
でも最低限のポージングは勉強してもらった方がいいな…
後で資料を送るとして…」

手持ち無沙汰のまま育代はギリリーからの指示を待つ。
今の自分は脅迫されているから彼の言う事は聞かなくてはならない。
平穏な家庭を第一に考えるのが星空育代の思考だからだ。



「ふう… 脱ぐ前のは大体こんなもんでいいでしょう。
次は… つとその前に…」

ギリリーはカメラをベッドに置くと衣服を脱ぎ始めた。
シャツを脱いだ時は目を背けた育代だったが
ズボンを脱いだ時から目が離せなくなった。

パンツ越しに勃起しているペニスが目に付いたからだ。
パンツを降ろして生々しいペニスが露わになった時、
育代は息を飲んだ。



「ではミュキさん。脱いでください」

「はい……！」

自分でも星空育代からミュキに切り替わったのが分かる。

彼の勃起している姿を見て嬉しく思ったし、

下腹部から腿へ伝わる愛液が否応なく

発情している事を意識させる。

だが決してセックスしたい訳ではないのだ。

愛しているのは夫の博司ただ一人。

そこに偽りはない。



一枚一枚写真を撮られるたびに背筋にゾクゾク快感が走る。
これはもう愛撫だ。

育代の下腹部同様、ギリリーの亀頭も我慢汁で濡れていた。
フェラチオくらいだったらしてもいい。
いや、むしろ舐めろと命令される事を期待している自分がある。



「はあはあ……！ いいですよお、ミュキさん！
とってもエロい表情です！」

「えっ？ あ…… はい……！ ありがとうございます……！」

「今のミュキさんなら

昨日のライブ配信のすごさが分かりますよ！
ちよっと見てくださーい！」

「はい……！」

ベッドに置かれたノートパソコンには
昨日のセックス動画が流れていた。
ギリは複数のモバイル端末を
持ち歩いているらしい。



「はあはあはあ……！」

自分がセックスしている光景を

世界中に発信した事実に変更して興奮した。

閲覧数の増加やコメントが流れる様子は

全部自分のセックスに対する反応だ。

恥ずかしくて嬉しくて、

とても淫らな気分にした。





「ミュキさんのファンが

この動画を見た時に

何て思ったか分かりますか？」

「え…？ エッチだなあ、とか…？」

「それだけでは不十分です」

「あぁっ！ あくぅうう……！」
「ここにー！」
「このおマンコにチンポ
ぶち込みたいうって
思ってるんですよッ！
こんな風にッ！」
「ダメです！ ダメ……！」

ヌ
ヌ
ヌ
ヌ
ヌ



「はあはあはあ！
ダメならしょうがないですねえ！
いいですよ！
ミユキさんが自分で抜いてください！」
「はあはあはあ……！！
んっ！ んっ……！！」



「はははは！
腰を振ってるようにしか見えませんよ！
すごく気持ちイイです！
また中出ししちやいそうだ！」

「くう……！ はあはあはあ！」

「そ、それ……！ 撮ってるんですか!?!」

「はあはあ！ ライブ配信中です！」

「えっ……!?!」



子宮をデコピンされたかのような
オーガズムの衝撃が育代を襲った。
ペニスを抜きたい意志とは裏腹に、
腰が小刻みに震えてペニスを離さない。



「すごくエロいですー！
皆ミュキさんのおマンコに突っ込みたくて
チンポしごいてるんでしようねえー！」
「ん！ んん！ んんん……！」
「こんな風にー！ こんな風にー！」
「あうあうあうー！ だ、ダメ……！」
へ…… 変になるう……！」





「変じゃないですよ！
とっってもエロいです！
もっとエロくなってくださいー！」
「はうっ！ はぐっ……！」
「んああっ……！」
「ほらー！ ほらー！ ほらー！」
「も、も、もう……！ ダメ……！」



「はーはーはー!!」

逃げようとしないうって事は
中出ししても良いんですね!

「はっはっはっ……!!」

「良いんですね!」

「はっはっ…… はい……!!」

「あう……ッ！
あうう……ッ！
あ……ッ！
「はあはあはあ……！」



育代はもう何も考えられなかった。



はは
はは
はは

は
は
は

舐めろと命じられるままに
育代はギリリーのペニスを舐めた。
オーガズムの痺れが
まだ脳を揺さぶっているらしい。
思考が鈍り、
フェラチオも気が抜けていた。





「実はさっきの
ライブ配信じゃなかったんですよ」
「…そうだったんですか？」
「ガツカリしました？」
「いえ…別に…」
「リアルタイムで配信する時は
ちゃんと打ち合わせした方が
良いかと思いましたがね」
「…これからもうこういふ事を
続けるんですか？」
「ええ、もちろん」



「いつも中出しされると困るんですけど…
あ、セックス自体困っちゃうんですけど」


「それについても配慮しております。

アフターピルを用意してきましたから
飲んでください。

3日以内なら効くヤツです」

「そ、そうですか…」

「ありがとうございます…」



「セックスを拒否する事は諦めてください。これは脅迫です」

「は…はい…」

「星空さんには極力迷惑を掛けない事。ミュキさんの時だけセックスする事。」

「この2点は守るのでご安心ください」

「…ありがとうございます。」

あの…病気とかあると困るんですが…」

「その点もご安心ください！」

私、恥ずかしながら

今まで童貞でございましたので」

「そ、そんなんですか…」

「ええ、ミュキさんに童貞を

捧げる事が出来て嬉しいです！」

「いえ、そんな…」

ありがとうございます…」

「そんな訳で
まだまだセックスし足りないのです。
打ち合わせも兼ねて
もう一度セックスさせて頂いて
よろしいですか？」

「…断れないんじゃないですか？」

「はい、もちろん」

「わかりました…」



「はっはっはっ…」

「旦那さんのスケジュールと娘さんのスケジュールにミユキさんが自由に動ける時間、っと！」



「はあはあはあ……！」

「フォローワーの中で

ミュキさんとセックス出来るのが

私だけってのは良くないと

思うんですよねえ！

皆ミュキさんと

セックスしたいと思うから！」

「こんな風に！…こんな風に！」

「はうっ！ あううっ！」



「はあはあ！
色んな人とセックスするのは
ちよつと……！」

「私とだけ
セックスしたいですか!？」

「そつ、そういう意味じゃ……！」

「あう！ あう！ あう！」

「はあはあはあ！」



「やっぱり童貞にミュキさんとセックスさせたいですねえ！ミュキさんの熱心なファンで30歳以上のこじれた童貞！」

「はあはあ… 童貞…」

「そう！ 嘘付く人もいるだろうから探すの大変でしょうけど」

「ミュキさんのために頑張りますよ！」

「はあはあ… ありがとうございます！」

「これだけはダメって」

「NGな人はいませんか!？」

「ええっと…! はあはあ！」





「はあはあ… 乱暴な人ですかね…」

「乱暴NG…っと！」

「他にはありませんか!？」

「ええっと… 性病の人はちよっと…」

「その辺はキチンと

調べますから大丈夫です!

好みとかはどうでしょう!？」

「すっごいブサイクとか!」

「それは別に… 大丈夫です…!」

「わかりました!」



「もう出ますよー！
中に吐きますねー！」
「はい！ はあはあはあ！」

「はー!! はー!! はー!!」

「はーはーはー!!」

「今日も最高でした!」

「ありがとうございます!」

「いっ、いえ……! どう……!」

「いたしまして……!」

「撮影に掛かる出費は

全部こっちで持つんで

ミユキさんは何も

心配しないでくださいね!

「ありがとうございます……!」




後日また打ち合わせする
約束をしてこの日は解散となった。

はは
はは

はは
はは



A woman with short, vibrant purple hair and a white long-sleeved top with a ruffled hem is standing in a modern living room. She has a confident, slightly smug expression with her eyes closed and a small smile. The room features a large television on a dark stand, a brown leather sofa, and a glass coffee table. The lighting is warm and ambient.

「育代、浮かない顔してるけど何かあったのかい？」
「え!?! いえいえ、大丈夫大丈夫! そんな顔してた？」
「うん、困ったような… それでいて少し嬉しそうな…」
「何それ? なぞなぞ?」
「そんな顔してません! 早く食べちゃって!」
「はーい」「はーい」

ふたりの顔をまともに見れなかった。
ついさつき他の男に膣内射精されたばかりなので
夫の博司を前にすると居心地が悪い。
精液はシャワーで流したが子宮内に残っている精液が
時折下着を濡らすので平常心でいるのは無理だ。

表記が違うとは言えアカウント名を娘の名前にしたのは
今にして思えば間違いだった。
ミュキと呼ばれるたびに娘のみゆきの顔が浮かぶ。





罪悪感が胸を曇らせる…

が、痛むほどではない事に少なからず驚いた。

昨晩は夫以外の男とセックスしたショックで

鬱になりかけていたが今はどうだ。

ギリリーとのセックスを思い出すだけで濡れてしまうほどだ。

シャワーを浴びても未だに彼の体臭と精液の匂いが
鼻に付いている。

それなのに不快に感じない。

不快になるところか興奮さえ覚えてる。

いや、考えるのはよそう。

愛しているのは間違いなく博司の方だし、

ギリリーとの関係を拒めば家庭が崩壊する危険がある。

博司のためにも自分は彼の命令を聞くしかないのだ。

彼の発案した企画を思い出す。
童貞数人を相手にした自分はどんな風に映るだろう。
セックス経験の少ない自分が
セックス経験のない複数人を相手にするのだから
きっと上手く出来っこない。
複数人にレイプされるような状況は避けたい。
そこの所はギリギリにも伝えておかなければ。

育代はいつの間にか博司以外の男に抱かれる事に対して
抵抗がなくなっているのに気付いていなかった。



夏のまぶしい日差しが頭上を降り注ぐ。

さざ波の音と潮の香りが海に来た事を実感させてくれる。

海はいつ来ても爽やかな気分になるが今日は一味違う。

家族と一緒に来ていた時のような露出の少ない格好ではなく、ギリギリが用意してくれた半裸に近い際どい水着で

浜辺の男たちを釘付けにする快感は育代の体を火照らせた。

すぐ傍にいるギリギリの存在は育代の前では霞むよう
男除けとして機能せず、ナンパしてくる男たちを

何度となく断らなければならなかった。



誘いを断るのは神経を遣ったが
声を掛けてくる男達がSNSでのフォロワー達と被って見えて
微笑ましく思えた。

「そろそろ来るはずですよ。 おっ、来た来た」
ギリリーが手を振る先に3人の男達がいた。
育代は自分とセックスするかもしれない男達の姿を
緊張した眼差しで見つめた。





「ほ、本物だ……!」

「すっげえ……」

「あ、あの! いつもお世話になっております!」

「ミュキさんのフォローの鈴木です!」

「サクっす! sa9でサクです! いつもコメントしてます!」

「た、タラコです…… お、お会いできて、こ、こ、光栄です」


「**ミュキです……! あ、あの……! よ、よろしくお願ひします!**」

「こちらこそよろしくお願ひします!」

「よろしくお願ひします!」**「こちらこそ……!」**

「炎天下の下で長話もなんですから海に入りましょうか。
撮影しますがリアルタイムで流す物ではないので
リラックスして普通に遊んでください」


「はい!」「はい!」「はい!」「はい!」



SNSに載せている物が載せている物なだけに
いきなりセックスを求められるのではないかと
不安だったが杞憂のようだった。
彼らは三人とも初対面同士の距離を保ってくれているお蔭で
育代も普通に接する事が出来た。

話すのが苦手ではない育代が彼らと打ち解けるのに
そう時間は掛からなかった。
三人ともコメント等で覚えのあるフォロワーだったため
親近感が沸いたのも理由のひとつだ。

優しさや気遣い、そして好意が伝わってくると
育代は彼らに対して何かしらの形で応えたいと思った。



浮輪で遊ぼうと提案すると全員快く賛同してくれた。
さり気なくタラコの体に密着すると動揺しつつも
喜んでくれたのが分かる。
育代の後ろに座ったサクも育代を見習って体を密着させてきた。
お尻に彼の勃起したペニスが触れた瞬間は
思わず変な声が出そうだった。

波にさらわれ浮き輪が揺れ、二人の体も揺れては擦れる。
男達の硬い体に挟まれて興奮したのを誤魔化すように
年甲斐もなく黄色い声を上げてはしゃいだ。

色仕掛けで男を誘惑した事のない育代にとって
今の状況は新鮮で何だか
自分が違う人間に変わったように思えた。

楽しい時間はあっという間に過ぎ去り
辺りはすでに暗くなっていた。
育代、ギリ、鈴木、サク、タラコの5人は
今夜泊まる旅館で夕食をとっている。
新鮮な海鮮料理に舌鼓を打って歓談している所に
ギリがカメラを構えた。





「ミュキさん、海は楽しかったですか？」

「はい、すごく楽しかったです。」

「何だか学生時代を思い出しました」

「JK、JDのミュキさんにも興味はありますが…」

それはさて置き！ お楽しみはこれからですよー！

今夜の目玉は… 童貞三人の生ハメ筆下ろし大会です！」

「え……」

「「ウオオオオオ！」」

「男性経験の少ないミュキさんには

ちよっぴりハードル高いですけどセックス出来そうですか？」

「あ……えと……」

事前の打ち合わせでこの企画は

全て避妊具なしのセックスを行うと聞いていた。

そのためわざわざ育代の安全日に

スケジュールを合わせてくれた事も

三人の性病検査も行ってくれた事も知っている。

あとはミュキさんがその気になれば

やっっちゃってください、とギリギリが言っていたのを思い出す。



三人をチラと見る。

それぞれが食事の手を止め恥ずかしそうに、
だが期待に満ちた目で育代を見ていた。

揃いも揃っていい大人なのに捨てられた子犬の様な瞳だった。

30代、鈴木に至っては50代くらいだろうか。

その年齢まで女性経験がなかった男たちにとって
自分は最後の希望なのかもしれない。

昼間、海で楽しく遊んだ光景も重なって

彼らが無碍にあしらう事はとてもじゃないが出来なかった。

「はい… 私で良ければセックスさせて頂きます…」

「お願いします！」

「ありがとうございます…」

「よろしくお願いします！」



シャワーを浴びた育代はタラコが待つ部屋へ向かっていた。これから彼に抱かれるために。

セックスする順番を育代は決められなかったのので公平にクジ引きで決められた。

タラコ、サク、鈴木の順だ。

冷静に考えれば今日初めて会った男三人とセックスするなんてどうかしている。

ギリーに関して打ち合わせと撮影のついでとして2、3日に1度はセックスしているの

もう慣れたがやはり初めての相手に抱かれるのは緊張する。貞操観念が中途半端に働いているのも問題だ。

今や夫とどんなセックスをしていたのかも忘れるほどギリーとセックスしている育代だが

他の男に抱かれるのは夫に悪いと考えてしまう。

優柔不断に迷いながらタラコの部屋のふすまを開けた。



「よ、よ、よろしく、お、お願いします……！」
タラコは正座で育代を迎え入れた。
童貞の繊細さを考慮したギリリーは
撮影機材を録画状態のまま残して
他の二人と共に別室で中継している。
つまり、この部屋に入った瞬間から
フォローワー全員に見られていると言っている。
迷いは吹き飛んでいた。

「み、み、ミュキさん……！ すいません……！
勃たなくなっちゃいました……！」
育代とタラコはふたりして固まった。

「はふっ！ はふっ！」
乳首にむしゃぶりつくタラコの頭を育代は優しく撫でた。
勃起出来なくなった男の対処を知らないので
好きなようにさせた結果がこれである。
勃たなくなつたからと言って順番を後回しにするのは
逆効果だと育代は本能的に感じた。
悲しい気持ちをそのままにしておいてはいけない。
だから全力でフォロースしようと決めた。





「み、ミュキさん、すいません…あの、もういいですよ…
サクさんの所行って…」

「どうして?」

「な、何か勃起そうにないし…他にも待ってる人がいるから…」



「行かない。おチンチン入れるのだけがセックスじゃないよ。
私の体、いっぱい触って……」

「は、はい……!」



「はあはあ！ や、柔らかくて……！ 良い匂いがして……！
すごく気持ち良いです！」

「私も…… 気持ち良いよ…… 時間はいっぱいあるから……
今出来なくてもおっきくなくなった時にしてあげるから安心して？」
「はい……！」



「あ、あの… ミユキさん… 大きくなってきちゃったんですけど…
入れていいですか？」
「うん、もちろん！」

「はあはあはあ！
あ、あれっ…？
は、入らない…？」
「ううん、もっと下」

アッ！

アッ！





「ここ、ここですか？」
「そう。」
「そのまま挿入れてみて……」
「はいはい！」

又
又
ッ



「あっ……！」
「ううっ！ は、入った！」

ぐんぐん



「ん… ちゃんと入ったね」
「はい！」
「すっごく気持ち良いです！」
「ふふっ、童貞卒業おめでとう」
「ありがとうございます！」
「好きなように動いてみて」
「はい！」



「ええ、でももったいなくて……！
も、もっとセックスしていたい……！」

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ



「はあはあはあ！」
「はあはあ！」
「すごいです……！」
チンコがしびれて……！
すぐ出ちゃいそうです……！」
「はあはあ……！」
「いいよ……！ 出しても……！」



「うん……！
いっぱいセックスして
あげるからね……！」
「はい！ ああ、出る！
クソッ！
もっとしていたいのに！
ああっ！」

クソッ
クソッ
クソッ



「んんっ！」

んんっ
んんっ
んんっ
んんっ
んんっ



「はあはあはあ……！」

「はあはあ……」

「こんなにあくさんいっぺんに
射精したのは初めてです……」

「すぐく気持ち良かったです……」

「私も気持ち良かったよ。」

「またしようね」

「は、はい！ 是非！」

はあ


はあ

「はあはあはあ……ん……！」
タラコとのセックスの後、次に控えているのは
サクとのセックスだがその前にシャワーを浴びる。
特に膣内に残った精液は出来るだけ落とす方が良い。
しかし精液を洗い落とすつもりが、
いつの間にか膣口から溢れる精液を
ローション代わりにクリトリスをいじって
オナニーしてしまった。



タラコとのセックスでは母性を刺激されて
変にお姉さんぶってしまいセックス自体にのめり込めなかった。
あれはあれで良かったのだが
欲情した度合に比べて直接的な刺激が足りなかったため
こうして自身を慰めている次第である。





「ミュキさん、まずは一人目お疲れさまです。
とっても良かったですよ」
「はあはあ……！ ギリーさんもお疲れさまです……」
「おマンコの中のザーメン、指じゃほじくれないでしょ。
チンポで掻き出してあげますよ」
「は、はい……！ お願いします……！」

「あう！ あっあっ……！」
「クリちゃんイジリすぎて
足腰立たなくなっちゃわないでくださいね。
夜はまだ始まったばかりですから」
「はあはあ！ でも我慢出来なくって……！」
「私とのセックスの最高記録は5回でしたね。
一人につき2回やったら8回セックスですよ。
ゆっくりやりましょう」



「は、はい……！ すいません……！」
「いえいえ、それじゃこの辺で……ふう……」
「射精しなくていいんですか？」
「ハハハ、おマンコ掃除しにきたのに
中出ししちゃったら本末転倒ですよ。
楽しみは後に取っておきます」
「はあはあはあ…… はい…… 分かり、ました……」

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ



オーガズムに達しそうな手前だったので残念だったが
ギリリーの言う通り夜は長い。
これからすぐ行われるサクとのセックスに期待を込めて
風呂場を後にした。





「?！」
「...」

ゴキ

挿入してから膣内をペニスが
2、3回ほど
往復したらサクは射精した。
自分の勘違いかと思ったが
間違いなく膣内から
サクの子種があふれ出ている。





「ハハッ…」

気持ち良すぎてもう出ちった…

もうこれで終わり…?」

「うん。他にしたい事ない?

まだ時間あるよ」

「それじゃ…」

キスしていいっすか…?」

「うん」

「はあー… やっべ、キス気持ちええ…」
「ん… 私気持ち良いよ…」



「はあはあ はぶ んぶ」
「ちゅるるっ れろれろ」



「ミュキさん、タンマッス！ イッちやいそっス！」
「はあはあ！ おマンコでイキたい？」
「はい！ また中出ししたいっス！」
「はあはあ！ いいわよ……！」





「あくっ…!」
「に、二回目だから…!」
「今度はさっきよりも
マシンはず…!」
「うん」

あ
あ
あ
あ



「あっあっあっ!」
「んぐ! おおお!」

あ♡

あ♡

あ♡



「うっうっうっ！」
「あん……っ！」

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

「す、すんません…」

「ううん、

気持ち良かったよ」

育代はシャワーを

浴びる前にギリールを呼んだ。



「さっきの感覚がまだ残ってるんで長くは持ちませんよ！」
「はっはっ！ 中に出しちゃっていいから思いっ切り突いて……！」
「こんなにしてたらミュキさんが最後まで持ちませんよ！」





「生殺しのままの方が持たない！」

「思いつきり……！ は、激しく……！」

「もう私の方が我慢出来ないから出しちゃいますけどね！」

「うんっ……！ 出しちゃって……！ 奥の方に……！」





「はあっ、はあっ………!!」

皆の筆下ろしが終わった打ち上げの時に
思いつ切りミュキさんの中に出したかったんですがねえ……」

「はあはあ……!! ごめんなさい…… 我慢出来なくて……」

「ミュキさんに求められるのは

私にとって至上の悦びですからお気になさらず。

くくっ、童貞たちではミュキさんを

満足させるのは難しいみたいですね?」



「初めてだから仕方ないですよ…」

ギリリーさんは本当に私が初めてだったんですか？

最初の時からスゴかったですけど…」

「あれでも必死だったんですよ。」


さあ、最後は鈴木さんですよ！

頑張ってください」

「はい」

育代はふたりの童貞を食べ終えた事で
すっかり自信がついたようだった。
体の精液を洗い流すと落ち着いた足取りで
鈴木待つ部屋へ向かった。





挿入前に鈴木が要求したのはパイズリだった。
パイズリというものがある事はギリリーから教えられていたが
実際にやるのは初めてなので不安が残る。
彼が行う性教育にはあまり乗り気がしていなかったが
これからはフォロワー達を喜ばせるためにも
勉強しなくてはいけないと育代は思った。



「今までやった事ないんで自信ないんですが…」

「これ気持ち良いですか？」

「はい、大変素晴らしいですよ！」

「ミュキさんのオツパイでこんな事してもらえるなんて最高ですー！」

「そ、そうですか？」



「ええ！ いつもオカズにしていた
ミュキさんのオツパイでパイズリしてもらおうなんて
夢のようですよ！」

「あ、ありがとうございます……！」



初投稿から現在まで胸を武器にしていた育代にとって
そこまで褒めてもらえるのは素直に嬉しい。
自然とパイズリにも熱が入った。



「で、出ますー！」

「ミユキさんのおっぱいで私のザーメンを受け止めてくださいー！」

「はいー！」



ドポ

ドポ



「ああ……！　すごいです！

私のザーメンでこんなに汚れて……！

これ撮影してるんですよね？　一生のオカズにします！」

「ふふふ、ありがとうございます……！」

「すごい……　まだこんなに固い」



「ギリーさんから勃起薬頂きまして。

ほら、私結構歳いってるから。

よ、良かったら今度はその…せ、セックスを…！」

「はい、もちろん良いですよ。鈴木さんの童貞、私にください」

「は、はい！喜んで！」



「あ〜っ……!!
ミユキさん!!
すっごくいいです!!
すっごく
気持ち良いです!!」
「はあはあ!!
私も……!!
すっごく
気持ち良いですよ!!」

あ
あ
あ
あ
あ



「ああ、すごいすごい！
童貞で良かった……！」

あ
あ
あ
あ
あ



あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

「はあはあ！

ミユキさん、ピルとか
飲んでるんですか…？」

「ピルは飲んでません…

今日は安全日だから…」

「じゃ、じゃあー100%

妊娠しないって訳じゃ

ないんですね!？」

「そ、そうかも…」

「も、もっとミユキさんに

中出ししたいです！


妊娠するくらい…！」

「はい…

いっぱい

してください…！」





第二ラウンド開始かと思われた矢先にギリーが現れた。タラコもサクも一緒だ。「は〜い！」

鈴木さん童貞卒業おめでとうございます！これで三人全員の童貞卒業が無事終わりました〜！」

「イエーイ」とハモりながらタラコとサクはクラッカーを鳴らした。パンパンと甲高い音が鳴り、辺りに火薬の匂いと紙吹雪が漂った。

は〜い

は〜い

「それじゃ、
最後に記念撮影して
打ち上げにしましょっか！」
育代は鈴木に
うながされるまま
結合した状態で座り直した。



鈴木のペニスを膣内に挿入した育代を中心に
三人のフォロワーがピースサインをカメラに向けた。
育代も合わせてピースを作る。

「はい、チーズ！」
パシヤリ。



「はい、お疲れ様でした〜！
ビデオはまだ回しますけどこっからはオマケね！
お酒飲むのも風呂行くのも寝るのも自由です〜！」
「あ、あの… ミユキさんとその… あの…」
「もちろんセックスするの自由です！ ね？ ミユキさん？」

「はい♥ 皆さん、たくさんセックスしましょう♥」
「は、は〜」「は、は〜」「は、は〜」



一度は抱かれた男たちが相手だ。
セックスもフェラチオも抵抗はない。
むしろ快感を求めめる気持ちが強かった。




男たちの欲望を全身で心地良く受け止めていた育代だったが
突如鳴り響いた着信音で現実に引き戻された。
博司からの電話だった。





「旦那さんに心配かけちゃいけません。 ミユキさん、出て下さる」
「えっ！ い、今はちよつと…」
「まあまあ、そんな時間に時間も掛からないでしょうし。
ミユキさん手が塞がってるから鈴木さん持っけてあげてください」
「はい」



ギリリーは育代の携帯電話を鈴木に渡すと
ニヤニヤしながらカメラを構え直した。
明らかにこの状況を楽しんでいるように見える。
せめてセックスを止めるようにと言う前に
受話ボタンを押された携帯を耳元に押し付けられた。



『もしもし育代?』

「あ、あなた… ごめんなさい、

ちよつと手が離せなくて携帯見てなかったの…」

『ああ、いいよ。返信なかったから心配してただけだから。

高校の同級生の集まりだったけ。楽しんでる?』



「う、うん… 楽しんで… ます…」
『そりゃ良かった。帰りも気を付けてね。愛してるよ』
「私も愛してるわ… あなた…」



通話が切られると同時に歓声が沸いた。
「すっげードキドキしましたね」
「タラコさん動かないですよ。声が出ちやいそうだったでしょ」
「我慢出来なくて…」





「チンコ舐めながら喋ってたと知ったら旦那さん驚くでしょうね」
「やめてよ〜…」
「アハハハハ」



夫にバレるかもしれないという状況が
良いアクセントになったのか全員が興奮したようだった。
育代自身も改めて今が非現実的な状況である事を認識した。

んっ♡
しゅっ
んっ♡
んっ♡



あはれ

あはれ


あはれ



「はあはあ… 今日だけ特別だから… たくさんしましよ」
「はーいー」



何度もオーガズムに達して育代は思考が曖昧になっていた。
何度中出しされたかも覚えていない。



男たちは代わりばんこに育代を抱いた。
膣内に射精すると酒を飲み、次にセックスする番の男は
フェラチオで勃たせてもらおうという無限サイクルだ。
この時間が永遠に続くといい。
そう思いながら育代の意識は堕ちていった。

「いってらっしやい、あなた」
「いってきます」

夫の博司も娘の美幸もいなくなると育代はSNSのページを見た。



ミュキのページは脱童貞オフ会の話で盛り上がり、次回もあるなら参加したいという男たちで賑わっていた。

あまりこういう事を続けてはいけなくて頭では分かっているが、あの夜の事を思うと今でも下腹部が熱くなる。





「次はいつかしら… ギリーさんに相談しないと」
育代はこれから会うギリとセックスする想像をしながら
次に旅行出来る日を考えた。

完